

# 保護者の期待と小学校英語が求めるもの

京都市教育委員会学校指導課指導主事  
直山木綿子

## はじめに

今回の「第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査)」の結果をみての感想は、調査結果は正直である、ということです。つまり、この調査結果に、今の小学校英語の課題が見事に表れているということです。

では、具体的に、その調査結果をみながら、小学校英語の課題を確認し、そして、それを解決するための手立てについて考えを述べます。

### 1. 「小学校英語に関心、期待あり。でも小学校英語って?」という保護者の思い

「小学校の英語教育に、どのくらい関心がありますか」という問いに「関心がある(とても+まあ)」と答えた保護者は77.6%に及びます(図1-1-1)。そして、小学校で英語教育を必修にすることについて「賛成(賛成+どちらかといえば賛成)」という割合は76.4%、「反対(反対+どちらかといえば反対)」は14.0%で、「賛成」が「反対」を大きく上回り、保護者の小学校英語に対する関心と期待がいかに高いかがわかります(図1-2-1)。

ところが、学校で子どもが英語教育を「受けている」と回答した保護者に、「お子様が学校でどのような内容の英語教育を受けてい

るかを知っていますか」とたずねたところ、「知っている(よく+だいたい)」と答えた保護者の割合は42.7%と、半数を割っています(図2-1-6)。つまり、このことから、実際にどのようなことが学校で行われているかをよく理解しないまま、小学校英語の必修化に賛成をしたり、小学校英語に期待をもっている保護者がいるということになります。

このように、保護者の耳にあまり小学校英語の情報が入らないことには、次のような理由が考えられます。小学校英語は多くが「総合的な学習の時間」の中での取り組みのため、教科書がなく、子どもが学校の授業で何を学んでいるかがみえにくいこと。また、現在小学校で行われている英語活動が音声中心であることから、学習したことを子どもが家に持ち帰るといことが難しいことなど、小学校英語の性格に起因しています。

### 2. 「同じ苦勞をさせたくない」という保護者の思い

さて、小学校英語に対する思いは、保護者が受けてきた英語教育に対する思いと関係しているようです。たとえば、「あなたが受けてきた学校の英語教育は役に立ったと思いますか」という問いに対して、「役に立った(とても+まあ)」「役に立たなかった(あまり+まったく)」と回答している割合をみると、「英語が

好きで、英語で苦勞をした」保護者の場合はそれぞれ31.0%と68.9%、「英語が好きで、英語で苦勞をしていない」保護者は、32.0%と67.9%、「英語が好きでなく、英語で苦勞をした」保護者は、9.6%と90.2%、「英語が好きでなく、英語で苦勞をしていない」保護者は、6.2%と93.5%です(図1)。つまり、英語を苦勞せずに好きになった保護者でさえ、7割近くが、受けてきた英語教育は役に立たなかったと感じており、苦勞をした、しないにかかわらず、英語が好きでないという保護者は、9割以上が役に立たなかったと感じています。このような英語教育への思いは、次のよう

な思いとなって表れているようです。「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」という意見に対する保護者の意識を問う調査結果では、「そう思う(とても+まあ)」と答えた割合は、75.0%にも及び、「そう思わない(あまり+まったく)」と答えた24.1%の約3倍にもなります(図3-4-1)。そして、英語必修化賛成の保護者ほど、そう思っているという結果も出ています(図3-4-4)。

このように、役に立たないような英語教育を何とかしてほしい、早くから英語学習を始めると、英語が聞けて話せるようになるという幻想が、小学校英語により期待をもつこと

につながり、役に立たない英語教育を救うには、早期からの英語教育がよいということにまでなるのかもしれませんが。

### 3. 「これではちょっとね...」という保護者の思い

小学校英語に関する知識不足や、自分自身の英語教育の経験から、保護者が小学校英語に過度の期待をしていることがわかってきました。では、このように期待する保護者は、わが子が通う学校での英語教育をどう感じているのでしょうか。

英語教育の満足度についての調査結果は、次のようになっています。子どもが学校で英語教育を「受けている」と認識している保護者のうち、「お子様の学校で行われている英語教育について、満足していますか」という問いに、「満足している(とても+まあ)」と答えた保護者の割合は29.0%、「満足していない(あまり+まったく)」と答えた保護者の割合は41.8%です(図2-3-1)。わが子が受ける英語教育の現状に満足している保護者は三分の一に満たない状況です。その原因は、次のような調査結果からわかります。小学校の英語教育について不安を感じることをたずねたところ、「指導する先生の英語力が足りないこと」「教える内容が、先生や学校によって違うこと」に、小学校英語の必修化に賛成の保護者も反対の保護者も6割以上が不安を感

じています。また、「外国人の先生の数が足りないこと」に対しても小学校英語必修化に賛成の保護者は66.8%、反対の保護者は54.7%が「不安」を感じています(図1-5-2)。

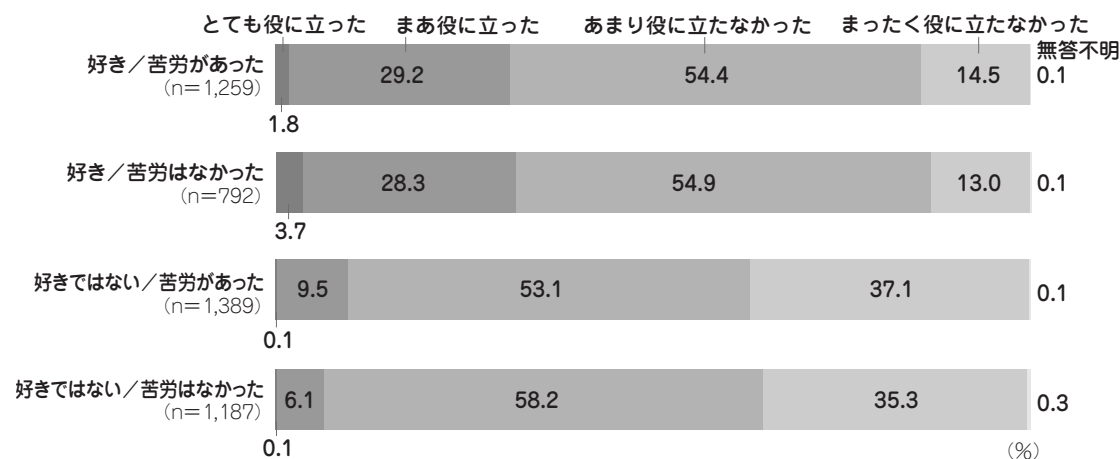
これらの不安は、保護者が期待する小学校英語と、実際に学校で行われている英語教育にズレがあるから起こるのではないのでしょうか。では、保護者は小学校英語にどのようなことを望んでいるのかを調査結果からみてみます。

「小学校で英語教育を行うとしたら、次のようなことをどのくらい望みますか」という問いに対して「望む(とても+まあ)」と答えた保護者の割合は、以下の通りです。「英語に対する抵抗感をなくすこと」92.2%、「英語の音やリズムに触れたり、慣れたりすること」92.1%、「英語を聞いたり話したりすること」86.2%、「英語の文字や文章を読むこと」67.5%、「英語の文字や文章を書くこと」61.3%、「外国人の人と交流すること」85.0%、「外国の文化や生活を知ること」82.3%(図1-6-1)。

このように、多くの保護者が英語を聞いたり話したりすることを求めていることがわかります。さらに、読むことを求める保護者は約7割、書くことを求める保護者も約6割にも及びます。すなわち、ほとんどの保護者が小学校英語にスキル力をつけることを望んでいるといえます。

ところが、「第1回小学校英語に関する基本

図1 保護者の英語とのかかわり：あなたが受けてきた学校の英語教育は役に立ったと思いますか(保護者の英語タイプ別)



\*「保護者の英語タイプ別」は、「英語が好きですか」の設問で「とても好き」「まあ好き」と回答した場合を「好き」、「あまり好きではない」「まったく好きではない」を「好きではない」とし、「今まで英語で苦勞したことがありますか」の設問で「とてもあった」「まああった」と回答した場合を「苦勞があった」、「あまりなかった」「まったくなかった」を「苦勞はなかった」として、それぞれの組み合わせから4タイプに分類した。

調査(教員調査)」によると、「英語を聞いたり話したりすること」が重要だと考える教員の割合は、保護者同様88.1%と高いのですが、「英語の文字や文章を読むこと」「英語の文字や文章を書くこと」が重要だと考える教員は、それぞれ32.7%、17.5%に過ぎません(図1-6-2)。

このように、保護者が期待する英語教育と、実際に学校で行われている授業、教員が目指しているものとは、違いがあるようです。

#### 4. 保護者の期待と

##### 小学校での英語教育との違いをなくすために

以上、みてきたように、保護者の熱い思いと、実際に多くの学校で展開されている英語教育には違いがあります。この違いは、なぜ起きるのでしょうか。先述したように、それは、小学校英語のねらいと、学校で行われている英語教育の実情とが保護者に伝わっていないということです。

児童は保護者の考えに影響を受けやすいものです。保護者が学校で行われている英語の授業に好感をもっていれば、それは児童に良い影響を及ぼします。ところが、「そんなことをやっているの!?!」「そんな英語の授業で大丈夫かしら」という保護者の不安や不信が児童の英語授業への不安や不信へとつながっていきます。

この点については、やはり各自治体や学校側が小学校英語のねらいや、どのようなことを学習しているのかを保護者に伝える責任があります。なぜなら、先述したように現在の小学校英語は、「総合的な学習の時間」の中で行われているからです。「総合的な学習の時間」の性質上、学習指導要領に学習内容や活動例が記載されておらず、教科書もありません。目標や学習内容は各校で実態に合わせて作成することになります。ですから、各自治体の委員会や学校が、その目標や、それに向けてどのようなことをどのような活動を通して学習しているのかを保護者に知らせる必要があります。学校側にすれば、授業をするだけで精一杯という思いがあるかもしれませんが、授業参観や学級通信を通して保護者に知らせることはそう難しいことではないと考えます。

また、PTAに協力を頼むのもよい方法です。PTA組織の一つに、学校内外の子どもを取り巻く課題について講演を聴いたり、体験をしたりする活動を保護者に提供する部会がたいいてあります。この会で、小学校英語について取り上げてもらい、保護者に小学校英語についての理解を深めてもらうのもよいでしょう。

ここで、私の親としての経験を例にあげます。娘が通っていた小学校では、英語活動が月に2回ほどありました。もちろん、私は仕事

柄、小学校での英語教育に大変興味がありましたので、英語活動があった日は、娘に「今日の英語の授業は、何をしたの」とたずねます。すると、娘は「動物のカルタ取りをした」「色を習った」と答えます。

なるほど、「熊はなんていうの?」「Bear.」「じゃあ、馬は?」「Horse.」「赤は?」「Red.」「よく知っているね」「うまいね」とこんな会話が英語活動のあった日はありました。ところが、私が待ち構えてたずねると、だんだん娘の返事の声に元気がなくなり、「今日は、英語、なかったよ」という返事になりました。

子どもにとれば、英語活動は楽しい。でも、それは、教室の中で、担任の先生とたまに来てくれるALTがいて、友だちと英語を使ってさまざまなやり取りをするからこそ楽しいのであって、家に帰って、矢継ぎ早に、「これは英語でなんというの」「あれは」などとたずねられて、試されて、楽しいはずがありません。

こんな失敗をするのは私だけかもしれませんが、親というものは、わが子が力をつけてくれるのを楽しみにしています。だからこそ、長いスパンで身につけていくであろう小学校英語のねらいをついつい忘れ、あれが英語でいえたか、これが英語でいえたかと目先のことに終始してしまうことがあるようです。

また、小学校で英語活動が行われるようになって、英会話学校に子どもを通わせる保護

者が増えたという話をよく耳にします。ある地域のある学校では、半数の子どもが英会話学校に通っているという話も聞きました。英会話学校に子どもを通わせることは問題ではありませんが、それが子どもの負担になったり、過度の競争を招くようなことになったりでは、問題といわざるを得ません。

このように、小学校での英語教育のねらいや大切にしていることを十分に理解しないがためにしてしまう失敗を保護者がしないためにも、子どもに英会話を習わせる場合、学校で行われている英語教育を十分理解した上で決めてもらうためにも、保護者には小学校で行われている英語教育について理解してもらうことが大切です。

先生には、保護者に、学校では、どんなことを、どんな活動を通して学習しているのか、目標はどのようなことなのかを知らせて欲しいと思います。そして、自治体には小学校英語のねらい、小学校英語でつく力について、保護者に説明する必要があります。多くの保護者が抱いている「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」という幻想に対しても、正しい情報を伝えなければなりません。言語習得上、外国語学習を早期に始めることによる効果は、音声面に認められているだけです。つまり、早期から英語学習を行った結果、よりネイティブに近い発音やイントネーションで発音できるようになりますが(ネイティブに

近い発音やイントネーションで発音できることがメリットかどうかは別問題として)、英語の力が伸びたというデータは出されていないのです。また、小学校から英語活動を始めたからといって、すぐに英語が聞けて、話せるようにはならないこと、そして、そのようなスキルをつけるためではなく、人と人との言葉でコミュニケーションを図る楽しさ、言葉の面白さを子どもたちに気づかせるという、本来の小学校英語のねらいについて、保護者に情報発信をしていく義務があります。

英語教育を通してどんな力を子どもにつける必要があるのか、そしてどんな力がついてきたのかを保護者に、家庭に、社会に発信していかなければならないと考えます。

## おわりに

『第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)報告書』においても「何のために小学校で英語教育を行うのかを、教育委員会や、学校、教員が理解しなければなりません」と述べました。教育は、教育委員会、学校や教員だけが担うものではありません。保護者も、家庭も、社会も、ともにわが国の未来を担う子どもたちにどんな力をつける必要があるのかを討議しなければなりません。しかし、小学校英語に関しては、どうもこの「子ども」の部分が抜けて、周りの大人が違う目的で動いているように感じられてなりません。

だからこそ、もう動き出している小学校英語ですが、子どもといつも接している学校が、教員が、いま一度、自分の実践を振り返り、